

## I. 開催概要

NPO法人ピピオ子どもセンター設立5周年記念シンポジウム

～居場所のない子どもたちのスタートラインづくりのために～

(入場無料・予約不要)

日時 平成28年1月24日(日) 13時30分～16時40分

場所 広島弁護士会館3階ホール(広島市中区上八丁堀2-73)

主催 NPO法人ピピオ子どもセンター／公益財団法人マツダ財団

後援 広島弁護士会

来場者数 70名

プログラム

第1部 活動紹介・講演

1-1. 「NPO法人ピピオ子どもセンターの活動の歩み」

NPO法人ピピオ子どもセンター事務局 弁護士 寺西 環江

1-2. 「スタートラインプロジェクト活動報告」

公益財団法人マツダ財団 世良 和美

2. 子どもシェルター「ピピオの家」退居者の声

子ども担当弁護士 儀保 唯

3. 講演「子どもが生きていくことを支えるケア

～小規模施設における統一的ケアの必要性」

広島国際大学医療福祉学部准教授 岡本 晴美氏

第2部 パネルディスカッション

居場所のない子どもの実像、シェルターや自立援助ホームの現状を踏まえた、シェルター、自立援助ホームの支援の在り方についての意見交換

<パネルディスカッション登壇者>

西崎 宏美氏 (NPO法人子どもシェルターモモ副理事長, チャイルドラインおかやま代表)

岡本 晴美氏 (広島国際大学医療福祉学部准教授)

清水 克之氏 (広島文教女子大学人間福祉学科准教授, 元広島県東部子ども家庭センター職員)

鵜野 一郎 (NPO法人ピピオ子どもセンター理事長, 弁護士)

コーディネーター 平谷 優子 (同センター理事, 弁護士)

### 1. 開催の目的, 方法

NPO法人ピピオ子どもセンター設立5周年, スタートラインプロジェクト発足3周年を機に, これまでの歩みを振り返り, 成果や課題を整理することにより, 今後の活動の新たな課題, 目標, 展望等について地域の方々とともに考えるために, 当シンポジウムを開催した。

シンポジウムは, 2部構成とした。

第1部では, ピピオ子どもセンター及びスタートラインプロジェクトの活動紹介を通じて,

総括と課題の整理を行った。さらに、専門的な見地からの視点を頂いて議論を深めるために、広島国際大学医療福祉学部准教授の岡本晴美氏より、シェルターや自立援助ホームといった小規模施設における統一的ケアの在り方とその必要性についてご講演頂いた。

第2部では、子どものシェルター事業に携わるNPOの理事等と学識者によるパネルディスカッションを行った。第1部での報告や講演の内容を踏まえつつ、居場所のない子どもの実像、シェルターや自立援助ホームの現状、シェルター退居後の子どもたちへの支援の在り方、地域社会での支援の可能性等について意見交換を行った。

## 2. シンポジウムでの主な論点

第1部の活動紹介・講演、第2部のパネルディスカッションを通じて提示された論点には、以下のようなものがあった。議論のポイント、結論や提言とともに記載する。

### ●シェルターや自立援助ホームに入居し、退居していく子どもたちの現実の姿と課題

子どもシェルター「ピピオの家」の入居者は、16歳前後が多く、退居先も難しい問題。特に、現在、広島県には、女子用の自立援助ホームが無いため、他県に繋がざるを得ない状況である。自立援助ホーム「はばたけ荘」においても同様で、仕事も、すぐに長期の就労が叶うとは限らないので、面接、就職後のフォローをしながら、長期就労に繋げていく必要がある。

両施設ともに、子どもたちは「土台（根っこ）が不安定」な状況にあり、集団生活や大人との信頼関係構築が難しい場合もある。よって、子どものプライドを傷つけない配慮と、自己評価を上げられるように、意識をして支援する必要がある。

土台（根っこ）作りのための留意点として、岡本准教授は、子どもたちに以下3点を提供することを提言した。

- ①安定性、継続性を日常生活の中に作り出す
- ②自己と他者との間の境界線を体験的に学ぶ機会を作り出す
- ③自己信頼感と合わせて自己肯定感を育てていく

### ●ピピオのような小規模施設における運営上の配慮点

岡本准教授の報告では、近年主流となっている家庭的な養護を目的とした小規模施設において、その特徴を踏まえたケアのあり方を模索する重要性が指摘された。

例えば、小規模構造には、「職員の責任や精神的・身体的な負担の増大」「少人数の密な関係の中で、子どもも職員も逃げ場所がなくなる」「職員同士の干渉のしにくさ、学び合いの機会の減少」といった、小規模だからこそ抱えてしまうリスクもまた潜んでいる。ピピオのような小規模施設においても、これらを考慮した上で子どもの環境作りとスタッフの育成は、重要である。

前述の、「土台（根っこ）が不安定」な子どもたちに、土台作りの3つの留意点を提供するには、小規模グループケアを担う専門職としてのスタッフの育成が不可欠であり、その人材育成プログラムの体系化・構築に向けた研究を進める必要がある。

さらに、西崎氏、鶴野氏は、施設で働く職員の心身の大変さを指摘し、社会からの理解を求めた。

### ●シェルター等を退居した後の子どもたちへの支援の必要性

活動報告やパネルディスカッション全体を通じて、子どもシェルター「ピピオの家」や、自立援助ホーム「はばたけ荘」の退居後の問題が提起された。適切な退居先が無い、自立させるには年齢も経験も十分でない、長期的な就労が難しい、といった問題である。

登壇者からは、退居後も、「何かあったら相談できる大人の存在」「社会的知識を身につけるフォローアップ」等が必要であると指摘された。

また、これらを可能にするために、入居中から「SOSが言えるよう、大人・他人への信頼感を育む」「たとえSOSが言えなかったとしても、周りが何か気にかけてくれるような子に育てる」「退居前学び事業を行い、退居後フォローアップへの顔つなぎをしておく」など、退居前から施設内でも様々な試みがなされていることが紹介された。

### ●地域社会における、子どもたちへの支援の可能性

岡本准教授は、「子どもたちを、目に見えるところだけで判断し、レッテルを貼っていないか」と問いかけた。そして、聴講者に、「地域社会においては、子どもたちの背景を慮ったり、推し測り、理解を示し、共感して、率先してレッテル剥がしをしていただきたい、みんなであたかな見守りのリレーをしていただきたい」と訴えた。

これを受けて、コーディネーターの平谷氏も、「時々、子どもたちの堅い鎧から素直な可愛らしい姿がちらっと垣間見えることがある。幼い頃はみんなそうした姿だったはず」「だから、地域では、子どもたちが幼い頃からずっと関わり続けてほしい」と訴えた。

西崎氏は、「地域の人たちが、ちょっとおかしかったら声を掛けてあげる、ということが、子どもに限らず、困難を抱えた親にとっても有効ではないか」と指摘した。

また、「知る」ことの重要性も指摘された。「こういった子どもたちがたくさん存在するということを理解する、知ることが大切（清水教授）」「知らないということがどれだけ罪な事かということを思っている（西崎氏）」との発言もあった。

### ●居場所のない子どもたちに対する社会制度上の課題

清水教授からは、「子どもが現在の状況に至るまでの長い経緯に、福祉・社会制度は的確に役立っているだろうか」との問題提起がなされた。

「伴走型支援」が重要であるが、現実の福祉制度は、分野や年齢区分ごとに分断されてしまいやすく、分断を機に、困難を抱えた子どもや家庭が、急に社会から見えなくなっていく。また、問題が悪化し顕在化してから対応が始まる。こうした状況を根本的に改善する仕組みが重要だと、清水教授は指摘された。

その上で、「人の一生涯を、緩くでも切れ目なく見守る仕組みの構築」「生涯を通じた健康・家庭生活の健康診断」等の構想を紹介しつつ、予防的な、普遍的な制度、「普遍的な福祉」を提言された。

## 3. 実施結果（参加者のアンケートより）

来場者から回収したアンケートでは、全体を通じて、居場所のない子どもたちやシェルター等

について「現場からの生の声を聞くことができた」「現状や課題、難しさ等が非常によく分かった」とのコメントを多数お寄せいただいた。来場者の多くは、当シンポジウムのテーマ「居場所のない子どもたち」に比較的關係の深いお立場のはずであるが、このように幅広い生情報に触れる機会は、実はなかなか得られないものようである。

岡本准教授の講演については、「分かりやすかった」とのコメントが多く、ピピオ等をフィールドに現在進めておられる現在の研究の成果に期待するお声や、聴講者が自らを振り返ったり、自身の決意を新たにしたとお声も見られた。

パネルディスカッションについては、各パネリストが豊富な事例と高い専門性を背景に語り合うことにより、「多面的に考えることができた」「新たな気づきがあった」とのお声を頂いた。

自由記入欄には、「今日のシンポジウムを踏まえて自分は今後どう行動したいか」「自分の立場での今後の課題は何か…」といった記載が多かったのが、印象的であった。いずれも、「当事者」として当テーマに積極的に関わろうとして下さっていることが、とても心強く感じられた。

今回は、「居場所のない子どもたち」というテーマに比較的關係の深いお立場の方たちにお集まりいただいたが、それでも、様々な驚きや気づきを得たとのお声を多数頂戴している。であれば、当テーマに普段接点のない一般の方であれば、これらは、なお一層届くことのない情報であろう。

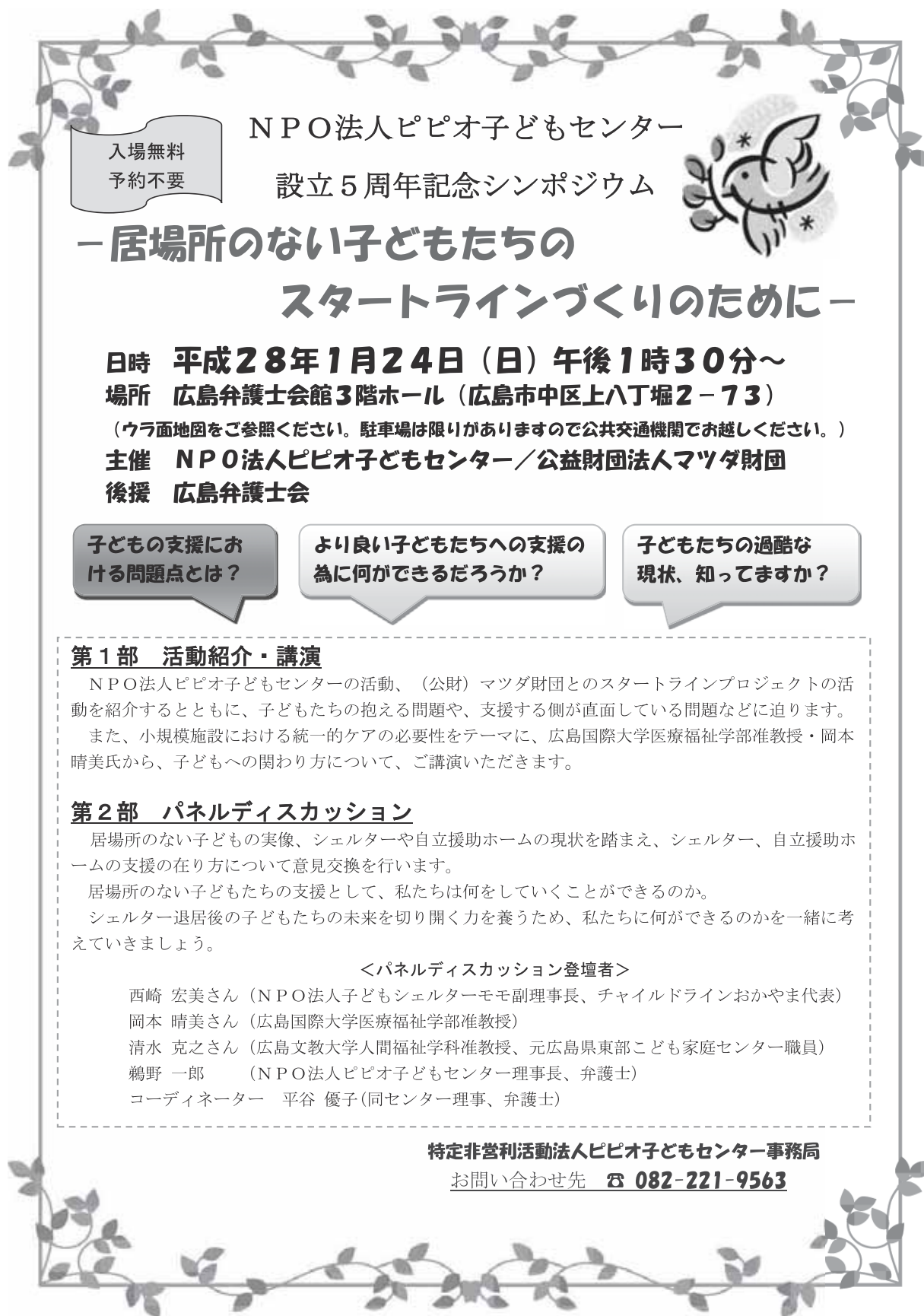
今後、パネルディスカッションでも挙げた「地域の人々によるあたたかい見守り」を実現していくためには、これまで当テーマに接するチャンスがなかった地域の一般の方たちに対して、どうメッセージを発してゆくかが重要であろう。

#### 4. 今後の展望

今回のシンポジウムを受け、子どもたちの自立への準備としての就労体験活動を試みる計画である。（「平成28年度「スタートラインプロジェクト」事業計画」）


就労体験活動は、子どもからの要請により実施されるため、ニーズが発生するかどうかはまだ不明だが、「希望者があれば挑戦してみよう」との思いが高まったのは、今回のシンポジウムの来場者アンケートで頂いたあたたかいメッセージの力も大きい。これだけ心強い応援団を持っているNPO法人ピピオ子どもセンター、そしてスタートラインプロジェクトは、これからも一層、活動に邁進し、さらなるステップアップを図って参りたい。

(参考 開催案内のチラシ)



入場無料  
予約不要

NPO法人ピピオ子どもセンター  
設立5周年記念シンポジウム



# — 居場所のない子どもたちの スタートラインづくりのために —

**日時** 平成28年1月24日(日) 午後1時30分～

**場所** 広島弁護士会館3階ホール(広島市中区上八丁堀2-73)

(ウラ面地図をご参照ください。駐車場は限りがありますので公共交通機関でお越しください。)

**主催** NPO法人ピピオ子どもセンター／公益財団法人マツダ財団

**後援** 広島弁護士会

子どもの支援における問題点とは？

より良い子どもたちへの支援の  
為になにができるだろうか？

子どもたちの過酷な  
現状、知っていますか？

---

### 第1部 活動紹介・講演

NPO法人ピピオ子どもセンターの活動、(公財)マツダ財団とのスタートラインプロジェクトの活動を紹介するとともに、子どもたちの抱える問題や、支援する側が直面している問題などに迫ります。

また、小規模施設における統一的ケアの必要性をテーマに、広島国際大学医療福祉学部准教授・岡本晴美氏から、子どもへの関わり方について、ご講演いただきます。

### 第2部 パネルディスカッション

居場所のない子どもの実像、シェルターや自立援助ホームの現状を踏まえ、シェルター、自立援助ホームの支援の在り方について意見交換を行います。

居場所のない子どもたちの支援として、私たちは何をしていくことができるのか。

シェルター退居後の子どもたちの未来を切り開く力を養うため、私たちに何ができるのかを一緒に考えていきましょう。

＜パネルディスカッション登壇者＞

- 西崎 宏美さん (NPO法人子どもシェルターモモ副理事長、チャイルドラインおかやま代表)
- 岡本 晴美さん (広島国際大学医療福祉学部准教授)
- 清水 克之さん (広島文教大学人間福祉学科准教授、元広島県東部こども家庭センター職員)
- 鶴野 一郎 (NPO法人ピピオ子どもセンター理事長、弁護士)
- コーディネーター 平谷 優子(同センター理事、弁護士)

特定非営利活動法人ピピオ子どもセンター事務局

お問い合わせ先 ☎ 082-221-9563